

少量消費野菜の需要の特徴と傾向—東京都卸売市場年報分析— 東横短大 ○茂木 美智子 東京農大 エリアス ベクリ

目的： 1970年以来野菜の過剰基調が続き、日本人の野菜消費は頭打ちの状態であるといわれている中で、消費単位は小さいが比価 (specific value) の極めて高い商品特性を持っている野菜の消費は拡大しているとの報告がある。消費多様化の一例ともいえるこれらの少量消費野菜は、調理において、香りを改善する、季節感を与える、色、形のような外観性を向上させるなどの特徴を持っており、機能上、香味菜と呼ばれる。ここではこのような野菜の需要に関する基礎資料の分析から利用動向を知り、主要野菜の消費における周年化傾向との比較検討を行なったので報告する。

方法： 資料は東京都卸売市場年報の類別品目別統計表より23品目を抽出した。1976年—1991年の15年間のうち 隔年3年毎1976, 1979, 1982, 1985, 1988, 1991の月別取扱高数量を二元配置分散分析法による時系列変動分析にかけた。傾向変動および季節変動から分析を試みた。

結果： 対象品目のほとんどについて、傾向変動、季節変動ともに5%以上の確率水準で有意であった。特に季節変動については、すべての品目において1%の水準で有意であった。季節変動要因寄与率が傾向変動要因寄与率を上回ったのは需要量の多い順にセロリ、にら、ねしょうが、にんにく、パセリ、はしょうが、ゆず、ししとう、みょうが、ねみつば、エシャレット、きりみつば、ペコロス、とうがらし、ラディシュ、ほじそ、わさびの17品目であった。この結果から本報で対象とした消費レベルにあるものについては、季節による需要が残されていると判断できる。